

ローアモシ
灌漑地区

タンザニアは意外と水が豊富だ。キリマンジャロ山から流れ出る水や、南部の低湿地もあり、水田は110万畝とされる。国土全体が9473万畝。うち耕地は1350万畝となっており、耕地に占める水田の割合は1割ほどである。

日本の支援で灌漑施設が整備され、それがタンザニアの稲作発展に大きく寄与した。キリマンジャロの麓にある、ローアモシ灌漑地区はその代表格で、1980年代に造成された。日本が指導したことから、区画は30^m×30^m(30×100^m)に整備され、タンザニア国内では大区画に属する。

他の灌漑地区も視察したが、区画は小さく、中には10×10^mというところもある。均平や耕起作業のしやすさからだと

30^m区画、普通型コンバインで収穫

一方、ローアモシでは、区画が大きいこともあって、トラクタによる耕起・均平、普通型コンバインによる刈り取りが行われている。ただし、自ら機械を持つのではなく、賃耕、賃刈り業者に依頼して作業してもらっている。この地区の組合員と懇談したが、業者による作業には一応満足はしているものの、ときどき作業が遅れる、料金が高いなどの声もあった。

ローアモシ灌漑地区は総面積2300^{ha}とされているが、実際は、水口

の上流に、勝手に開拓した水田が広がっており、それも数百^{ha}に及ぶという。米が儲かるというので、農家が水田を開いていったためである。なお、2300^{ha}のうち、稲作は1100^{ha}、畑作が1200^{ha}となっている。この地区の稲作の平均収穫は、1^{ha}当たり6^t(籾換算)で、タンザニア平均の1.5~2^tを大きく上回る。

キリマンジャロ農業研修センターは、このローアモシ地区の稲作技術を普及するために設立されたことは、前回も触れた。農業機械化についてみると、先進的な地区や経営はトラクタ、普通型コンバインを使っている。ちなみに、同国における導入台数は、2018年の数字で、トラクタが4096台、パワーティラーが5635台、コンバインが267台。コンバインは、作付けしている長粒種が脱粒しやすいのと、植え付けが手植えで列が揃っていない場合もあるなどの理由で、自脱型が使えないため、普通型が使われている。視察した中には、支援で導入した韓国製の自脱型コンバインが保管庫の中で一度も使われずにいた例もあった。

普通型コンバインは、安価だからと導入された中国製にとって代わって、クボタ製が人気を得ている。収穫時の籾のロスが少ないのと、きれいな選別により高品質な収穫ができること、そして、耐久性が高く、作業時の急な故障が少なく、また、故障しても対応が早いことなどが主な理由だという。

コンバインは1シーズンで多い場合だと600~800時間使う。結局、耐久性の向上など現地の機械ニーズに応えた結果が、クボタ製の優位をもたらしている。

(C)TUK・遠藤記者

日本の支援で造成・整備された水田が広がる(ローアモシ灌漑地区)④。ローアモシ灌漑地区の組合員の方々。課題は病害虫や水不足、機械の不足だと話していた

